

大人の本気度

■内館牧子さんの新作

5月から脚本家・内館牧子さん書下ろしの新作ミュージカル「秋田は何もない」が劇団わらび座で上演されます。このネガティブなタイトルにした理由について内館さんは、「県民が口癖のように『何もない』と言うのをやめてもらうきっかけにしたい」と語り、「秋田はすごく面白くて自慢できる所なんだ、と多くの県民に気付いてもらいたい」と述べていました。内館さんの秋田に対する熱い思いとメッセージが伝わってきます。

■「何もない」はずがない

昨年末12月20日のさきがけ新報に「政治参加の鍵は『地域愛』」という、東北大・河村准教授の講演内容を紹介する記事がありました。河村氏は、「秋田出身の学生の保護者から『秋田には何もない』との声をしばしば聞く」として、「大人や学校教育が『ここは何もない』と伝えれば、若者たちは外に出ていくばかりだ」との懸念を述べていました。

確かに、地方には都会にある高層ビル群やテーマパーク等はありません。だからと言って地方に魅力がないとするのは大きな誤りです。目の前にあるモノへの評価はそれぞれの視点や価値観によってかわります。そして多くの人は身近なモノの価値になかなか気づけないでいます。かつて私の周りでも「○○には何もない」というフレーズ

がよく聞かれました。ですが最近はいかにほ市は○○で良いところだ」という前向きな声が多く聞かれ、多くの人が誇らしげに「お国自慢」をしてくれるようになってきています。

■「お国自慢」

昨年末12月11日のさきがけ新報地方点描に「お国自慢」というタイトルの本荘支局長のコラム記事が掲載されました。鳥海山・飛鳥ジオパーク協議会が開催した小中高生の学習研究発表会についての感想でした。

特に、この記事の中の

「金浦中の1年生12人は地元のジオサイトを紹介するCMをお披露目し、お国自慢を繰り広げた。（中略）『にかほはすごい場所がある』という生徒の言葉に感じ入った」

「鳥海中『ジオ探検隊』の3年生6人も登壇し、おそろいのヘルメット姿で檜山滝を紹介した。隊長は『多くの人に訪れてほしい、自慢できる地域だと思う』と話した」

の2カ所は、「何もない」と思っていたのは単に「知らなかった」だけで、知らなかったことを知れば自分たちの暮らす地域の価値に気付くことができるようになるということを教えてください。

■試されているのは大人の本気度

若者たちが新たな目標や新たな学びを求めて地元を出ていくことにだれも異論はないと思います。残念なのは「何もない」からといった否定的な気持ちで地元

から出ていってしまったっている若者たちがいることです。しかも、その否定的な気持ちで大人たちの不用意な発言によって生まれているとするならばこれを見逃すことはできません。

現在、市は学校や地域の人たちと一緒に、仁賀保高校の魅力度アップに向けた取り組みを始めています。協議会メンバーによるワークショップを4回開催し、今後の具体的な方向性を確認しました。このワークショップに参加している協議会メンバーの一生懸命さを目の当たりにして、私は「大人たちが本気になれば空気感を変えられる」「熱意ある言葉が伝わらないはずはない」との思いをあらためて強くしているところです。

子どもたちの故郷への想いの強弱は、家族を含めた地域の大人たちの熱量が大きく影響すると思います。どのくらいの大人たちが子どもたちの成長過程に関与したか、集落の郷土芸能や伝統行事、学校行事やクラブ活動など、子どもたちのアイデンティティが形成される時に大人たちがどのくらい本気になって向き合ったかが大切なのだと私は思います。



にかほ市長
市川雄次

創造を
想像する

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市HPからご覧になれます。

